こんな考え方もありなのかな？

はじめに

　さて、ここで記述されていることは私個人が今までの経験や先人達が残してきた記録や伝説や宗教・哲学、各種メディアなどの報道記事やドキュメンタリーなど、以下の様な仮説を立てることにより、私個人が府におちる考え方であるとしたものである。また、この考え方自体を証明する根拠などは無いことを予めお断りしたい。
　残念ながら空想の域を脱しきらない内容であり、都合のよい考え方であり証明することが困難な事象を前提として解説したものである。
　しかし、このような考え方が間違いであることも安易には証明出来ないであろう。

脳はどの様にして機能しているか
機能の地図

こんな考え方もありなのかな？

　最近の脳研究成果から、人の脳は非常に騙され易い事が明らかになってきた。
　これは、人は見たり聞いたりしているものを必ずしも正確に区別して認識しているのではないと言うことが判ってきているのである。
　これは、必要とする重要な部分と不必要とする部分で感知したり処理したりすることを、異なる扱いをすることにより、余分な脳の処理を省き、より的確なものへ処理を集中させる仕組みを持っているようなのである。
　しかし、不必要とする部分の多くは大まかな処理がされるが、時には補完が行われ現実とは異なる扱いをすることもあるようである。

所謂、錯覚である。
　これらの錯覚は、人が生きていく上で身に付けてきたものなのである。
　（疑問、生来のものなのか、後天的なものか、つまり遺伝なのか学習なのか）
　こうした錯覚を利用した騙し絵などがある。

　このように、脳では

　別な話
　脳の記憶能力
　はたして、脳は本当に記憶として情報を蓄えているのであろうか？
　私は一部の短期記憶を除き、脳そのものでは情報として記憶を保持していないのではないかと考えているのである。
　突飛な発想ではあるが、脳内で情報を適切な形で記憶を保持しているのではなく、外部に存在する記憶領域に保存され、その外部記憶領域とのやり取りを行うための通信手続きとなる回路のようなものが脳内に形成されていることにより、外部の記憶領域とのアクセスが可能になることにより実現しているのではないかと考えるのである。
　ここでは、外部記憶領域はほぼ無限に存在し、その領域との通信に所要される時間はゼロに近いものと考えている。
　この外部記憶領域との通信が可能な回路網が脳内で形成されることにより、その記憶域へ記憶として留められ、更にその場所へアクセスすることで記憶を蘇らせることになるのではないかと考えるのである。また、この外部記憶領域は個々人が独立して持ち合わせているものではなく、多分、この世の万物に共通のものと考えている。　但し、どの部分にアクセスできるかは個々に独特として存在していると考えている。というのも、これらの考えは、我々はあまりに共通の認識や解釈、識別や感覚、思想や恐れ、死後の世界感や意思疎通、共感など漠然ではあるが理解しうる事柄などが多く見られることなどである。教育等によるものとも考えられるが．．．

　とある一説では、偉大な業績を残した偉人の多くは、その業績を得るのに異星人の訪問によりもたらされた知識によるものだという。

また、直接接触がなくても、睡眠時や瞑想時に異次元や瞬間移動などで見聞きしたものを具現化したのだという。
　つまり、知識や情報などを伝達したい旨の意思があり、それを伝え実現したものだと言うのである。
　このことは、より高度な知性をもった異星人が接触を試みることで実現しているというのである。
　つまり、コントロールされているということになり、監視されているということである。
　このようなことは、神からのお告げやその類の逸話など

　ある特別な人だけが得たものではなく、万物の存在に対してありえることなのである。

　このようなことが一概に否定できることではないが、そもそも脳が認識した情報を基にしていることであるので、勘違いとはいわないまでも、錯覚に相当する事柄であることも疑いの余地がある。
　しかし、私が考えている脳の機能の記憶域へのアクセスがあるとすれば、仮に異星人が存在したりしても、直接接触して得られた情報ではなく、その異星人もアクセスし記憶している分にアクセスすることが可能になった場合、その意味するところがたまたまその場に適した解釈として認識することが出来た場合は、この限りではないのである。

　ましてや、現在地球に存在する生命や脳を発展させ考える能力を発展させた人類だが、そもそも計画された存在であるとすれば、そこに至るまでの長い時間をどの様な存在がそれを知るのであろうか。多分その存在は、遥か過去に存在を喪失しているであろう。
　しかし、その喪失前に、自らの存在を復活させるため、ＤＮＡの構造をこの宇宙に拡散させ、また、その知識を普遍の場所に格納し、その拡散させたＤＮＡにその場所へアクセスできる構造を忍ばせたと考える方が合点するのである。

　ここでは認識しやすいことから、人をモデルに例を挙げていこう。

サバン
以心伝心
共感
生まれ替わり
臓器移植などであらわれる臓器提供者の記憶や性格の出現

同様の外部記憶へのアクセスを形成する脳の形成により、他人の経験を体験する。

ＤＮＡの情報だけでは説明できない本能や未獲得である記憶の発現
先天的なものであろうが、獲得した経験が子孫に受け継がれていくメカニズム

さて、外部記憶領域があるのならば、誰もがそこにアクセスできるようになれば、学ばなくとも、あるいは経験しなくても共用することが可能になるはずである。
しかし、偶然などがない限り、特定の場所にアクセスできるような脳の回路網は形成されないのである。また、仮にその回路網が形成されていたとしても、必ずしも同じ要求でアクセスできるとは限らなく、例えば音の記憶に対して、味の記憶としてアクセスしているのであれば、まったく異なる解釈となってしまうのである。
よって、一卵性双生児のような同一の脳の回路構成でもない限り、同じ部分へのアクセスの回路網は形成しにくいのである。
つまり、一般には同一の部分へアクセスできるような脳の回路網を形成する為には、学習や経験などをもって回路を確立していく努力をする必要があるのである。
その他のものは、われわれが経験できる範囲で共通の能力が獲得できるわけである。
結局のところ、努力無しでは得るものがないのである。

人が人として成長していく過程において、それまでの経験や学習等を経る結果、脳の神経経路が形成し、より多くの経験などがより強固な経路として確立されていく。このような経路の形成が人を人とたる者として行くのである。

子が親に似るのは、遺伝によるものもさることながら、こういった同一の刺激を受けることによる経路の確定こそが要因であると考えるのである。
つまり、経験しないものは、獲得できないのである。よって、経験を得るための学習や訓練、五感への刺激など、ありとあらゆる事象に接し、思考するなど

アハ体験も刺激の一部で、繰り返すことに強固なものとなる。
また、これらの刺激から

記憶のメカニズム

とある学説によれば、ブラックホールの表面には、取り込んだものの情報が残されているそうである。その情報を元に取り込んだものを復元することも可能であるという。また、ブラックホールの性質から、取り込んだものの情報は不変であるから、コンピュータで扱うＲＯＭの性質を持っているかもしれない。また、書き換え不可能な情報の格納場所として最も適した場所かもしれない。
しかし、ブラックホールに蓄積される情報とはそもそもどの様なものなのであろうか？。
我々が記録する最小の単位としてのビットがあるが、どのような組み合わせが何を示すのかの意味づけの情報が更に必要であり、本質的にはそれが何なのか区別をすることが出来ない意味をもたない物でしかないのではないかと考える。または仮に復元できるとするならば根本的な表現が存在するのか、するとすればそれは何によって決められたものであるのか。
意味づけの本質が存在するのか否か、それとも単純なものが何かを表現するに値するものになるのか。
物理的な法則とその大きさをもってして万物を表現し再現させることが出来るのか。
突き詰めれば単純そのもののものが膨大な時間を経過することにより、創造物へとなりうるのであろうか。疑問が絶えない。
この世のものが全て偶然の産物であるのか？（宗教的なものや神の存在）

空間も存在する、時空の考え方。

そもそも情報とは何であるのか。
それも明らかに存在するものであるのか。
ここでは、その存在があるというよりも、それを格納する存在があることを語っている。

エントロピーの増大（つまり情報は拡散し、意味を持たないものに変化していく）

隠された（コンパクトに縮小した）次元による繋がり。

過去に起こった現象は、小規模な形であれ、近似した現象が現在も観測しえる状況下にある。
そもそも、手近なところにも探ることが出来ない場所（特異点：ブラックホール）が存在する。

重力崩壊：支えるものがなくなり、極限への縮小が始まり、最小サイズ？になる。

我々の宇宙は膨張し、その膨張速度は加速しているそうである。
では、何ゆえ速度が加速しているのか。
そのヒントともいえるものが、この中にも記述されている。
それは、情報の時間的な増加によるものであり、その蓄積された量が加速を引き起こすのでる。
消滅することなく情報は増え続ける。蓄え続けているのである。
我々は、情報こそがダークマター（暗黒物質）（ダークエネルギー）そのものではないかと考えるのである。

統一理論

何らかの形で知識を蓄え伝達する必要がある。（そう仕向ける要素とは何か）
遺伝子
環境

選択
遺伝子には、まるで予め予測されていかのような機能を発揮するための要素を持ち合わせている。
何故か？、過去からの蓄積によるものなのか？こういった要素が絶滅を防ぐ機能なのか？
それはどのようにして獲得したものなのであろうか？

透視能力

所謂、事前に他者が書いた文面や物などを隠し、それを言い当てるものの場合、この考え方からすれば、実際に隠されたものを見透すのではなく、それを書いた文面や物を指示した者の脳への記憶域にアクセスする術があれば、容易に言い当てることが可能になるのである。
これは、より多くの人が関われば関わるほど、容易にアクセス可能な記憶域を確定できる可能性が高くなるのである。
ただ、アクセスできる記憶域を特定する能力を鍛え上げる必要はある。
一般にマジックなどの場合は、明らかにトリックがあるのだが、それ以外に、明らかに信憑性の高い透視の場合は、上記のような能力を身に付けた者のなせる業ではないかと考えるのである。

夢

想像を絶するような非現実的なもの、悪夢
正夢、ディジャブ
他人の体感

生まれ代わり、前世

人は生まれ代わりが起きるのか？

　こららも記憶そのものが外部に存在し、そこへの接続が可能な脳の神経細胞のつながりによる回路形成により起こりえる事象と考えている。

　また、共感現象や占いの類、マジックなどのトリックの一部、心霊現象や．．．　も同様の神経回路の形成の一端を利用した事象と考えるのである。

　これらの結論は残念ながら証明するには至っていないが、宗教やその他、伝説や
自分自身の体験から創造した考え方である。
このような事が起こっているのであれば、非常に腑に落ちるのである。

　あらゆる生命の記憶に関する部分で共通する部分があり、その記憶域を世代を超えてアクセスすることが可能になっているからこそ、生命の進化や本能の一部、

集団催眠、パニック
　自立型脳、他力本願型脳
　自立型脳は独自の判断が出来るため、他者よりも行動がバラエティーに富む一方、他理非本願型脳は協調性が高い故、パニックなどに陥りやすい。また、集団催眠のようなコントロールを受けやすい。
　マインドコントロールなども自立した考え方から他力本願型に切り替わることなどにより、行動や思考をコントロールすることが可能になるのである。（経路の変更）

洗脳

病気
　精神病、運動機能障害、言語障害、視覚障害、聴力障害、味覚障害、その他

必要は発明の母
　現代の我々は特に過去の遺産の存在に首をかしげる
　それは必要以上に巨大であり、それらに対して膨大な労力と時間をようしたとおもわる

ものや技術的に困難なのではないかと思われるものが多々ある。
　しかし、今の我々よりは遥かに時間と労力は存在し、それを支える経済が存在したのである。
　また、それらを実現する為に知恵を絞り成し遂げた英知があったのである。
　しかし、それらのほとんどは一部のごく限られた人物や知識の漏洩の防止などにより、門外不悉となり、忘れ去られているのである。
　現代にその英知が残されていなのは、そういった知識の隠蔽などや伝達するすべを持たなかったり、弾圧されたり、迫害されたり、葬り去られたりといった、絶滅、見捨てられたなど
　孤島であったりと知識の伝達が断たれたなど

最後に

以上のような考え方なのだが、これらと似たような発想や思考の類があるとすれば、それは同じ記憶域に到達した個々の思考や思いであり、共通なものであることの証であると考えるのである。
古今東西、過去から現在に至る様々な事柄は、このような記憶の共通な部分を獲得して得られたものであると考えるのである。
ここでは特に人について物語ってきたが、人に限らず、また、地球上の生命に限らず、ありとあらゆる存在にとっての記憶の領域を定義するものである。
よって、現在や過去の他の記憶や異なる世界などの存在との記憶が共有される可能性があることを示している。
　この宇宙が一点から始まり膨張し続けている。更にその膨張速度は加速している。記憶の領域もそれに伴い拡大し続けているのである。

　この考え方が人の脳の記憶の仕組みや他人との意思の伝達、過去の人物やその他の謎の記憶への解明などへ役立っていただけると幸いである。
また、何の努力もなしに賢くなったり、身体的能力を比翼させることはないということも

あえて記述しておきたい。

　人は苦悩し考えを巡らし多くの経験や訓練を行うことにより成長するのである。また、それらを怠れば思考は衰退し、肉体のコントロールを失っていくのである。